

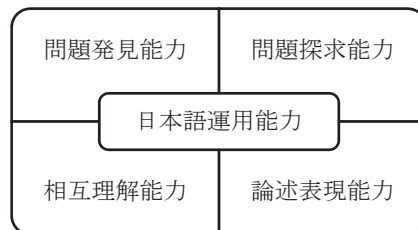
CEGLOC における TILL (Tsukuba Integrated Language Learning) の取り組み

CEGLOCセンター長 磐崎 弘 貞

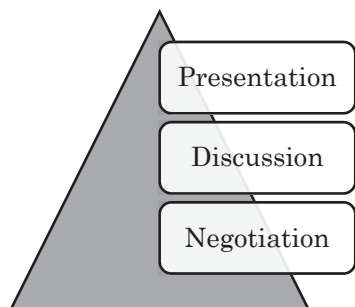
2019 年は新元号が公表される節目の年となるが、本学でも全学的に大規模な変更を施した新カリキュラムが導入される年となる。共通科目としての言語教育を担当する CEGLOC においても、当然ながら大きな改革が予定されている。

その骨子となるのは、「筑波式統合言語学習」(Tsukuba Integrated Language Learning, TILL)と仮称しているシステムの構築である。これは、CEGLOC 内では、外国語教育(英語+初修外国語)、国語教育、日本語教育(留学生向け)の3部門が、連携して筑波大生のアカデミックな言語運用能力を高めるシステムである。また、全学的視野で見ると、CEGLOC が、専門学士課程および大学院での言語運用能力強化のために協力しサポートする体制を想定している。

その実践のために、国語部門においては、問題発見能力(自ら課題を設定して研究)、問題探求能力(他説と自説の峻別をはじめとする学術研究手法の理解)、相互理解能力(コミュニケーション能力と発表能力)、論述表現能力(学術的に説得力のある文章を作成)の育成を通して、日本人学生の日本語運用能力を高めていく。これによって、後述する外国語運用能力育成の土台を構築することにもなる。



英語については、今後新入生は、高校在籍時に4技能5領域(読む・聞く・書く・話す[やり取り]・話す[発表])の英語授業を受け、即興的かつロジカルな発信スキルを向上させて入学してくる。また、入学要件として外部の英語4技能試験を受験することが課されるのも大きな変更の1つである。こうした新入生に対し



既に持っている英語運用能力を、本学の英語授業においてアカデミックな環境で飛躍的に育成していく責務を負う。そのため、CEGLOC の英語授業については、これまで2年生向けの専門橋渡し授業で行っていたアカデミック・プレゼンテーションやライティングの内容を1年次に前倒して実施することとしている。授業は、英語で行うことを原則とし、授業内外での e-learning もより活用することで、アカデミックなプレゼンテーション、ディスカッション、ネゴシエーションの各

能力を伸ばすことを意図している。このように、学術目的の授業を英語で受け、英語で発表・討論を行う **Content and Language Integrated Learning (CLIL)** の方式は、専門課程や大学院においても継続して実施していく必要がある。

初修外国語については、大学入学後に初めて当該言語に接することも想定するため、英語の状況とは異なるものの、入門レベルから基礎運用レベルまでを育成することを目標としている。その背景には、日本語・英語に加えて、もう1つ別の言語の視点を加えた複眼的思考で、世界の文化や社会の多様性を学びつつ、当該言語の運用能力を向上させるという、トライリンガル教育の理念がある。

また、留学生向けの日本語教育においては、今後はさらに **Campus in Campus** の構想も背景に、日本人学生と留学生の統合した教育にも尽力する必要がある。そのためには、来日時の多様な日本語能力レベルに応じた習熟度別日本語教育をさらに押し進めるとともに、増加する日本での就学・進学希望者についても対応できるように、日本人学生と統合した就職・進学活動のサポートも必要となる。

このように今後の変化は多岐に渡り、それに対する対応については多くの時間と努力が必要となる。そうした中で、各教員が多くの研究活動にも従事し、そのアウトプットを教育や実務に生かそうと実践いただいているのは、**CEGLOC** という組織に属する教員の多大な努力の賜物である。本紀要においてもそうした実践内容が盛り込まれており、ぜひ内外からのフィードバックをいただければ幸いである。